

陸奥宗光

国益を守るために カミソリ大臣、 三國干渉に 立ち向かう

眠れる獅子・清を相手に見事勝利した日本。

ところが戦後、露・独・仏が横槍を入れる。「三國干渉」であった。

外相陸奥宗光は、日清講和会議で見せたカミソリぶりを発揮、

干渉を受け入れつつ残りの権益を死守する。進退の呼吸を計り、

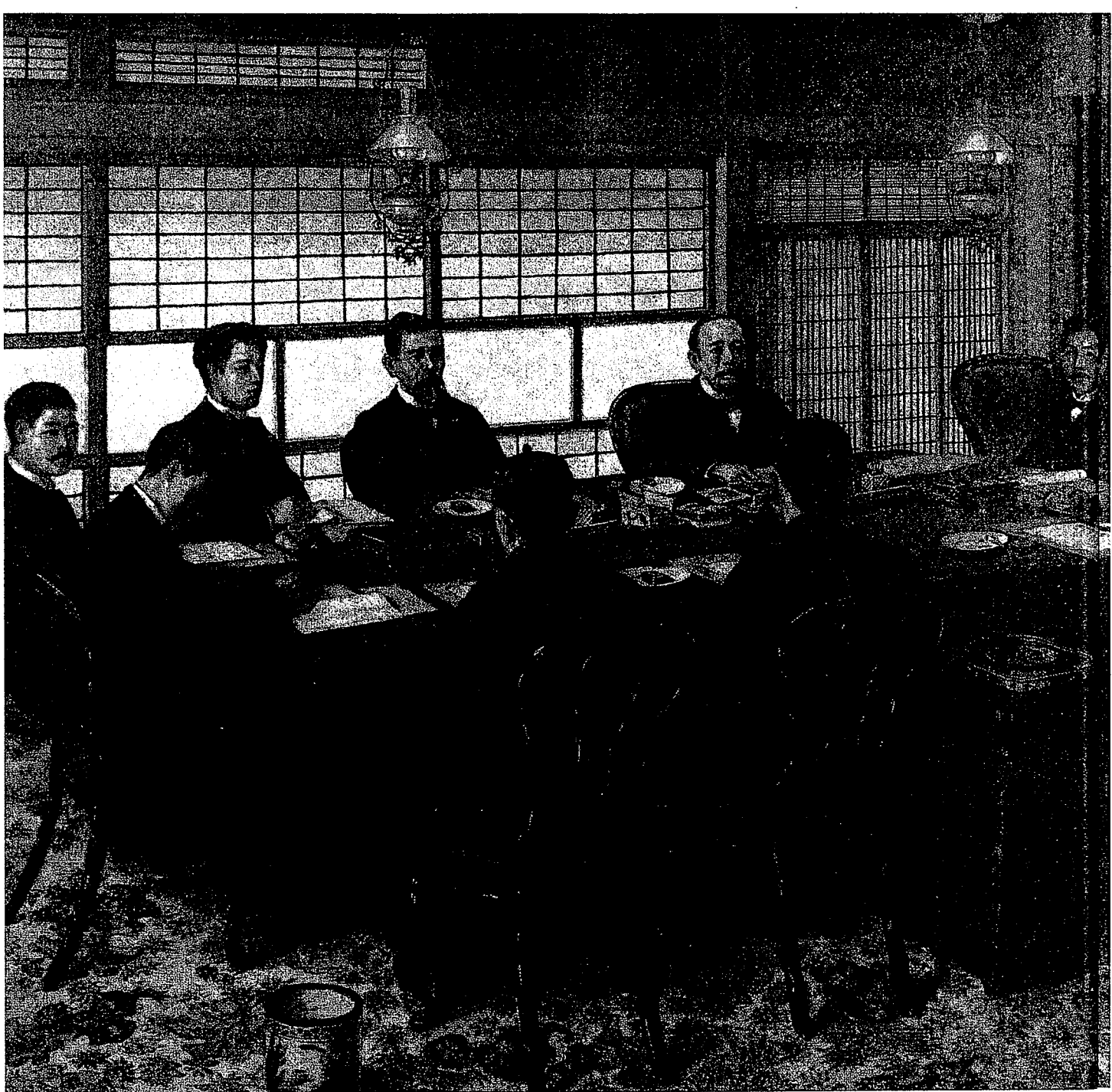
列強に立ち向かった陸奥の、外交の舵取りにおける信念とは。



渡辺利夫
Watanabe Toshio
● 拓殖大学学長 ●

自衛の道

現在、歴代の外務大臣の中で霞ヶ関の外務省構内に銅像が建っているのは、陸奥宗光だ



タイトル部分：陸奥宗光(国立国会図書館ホームページより)「下関講和談判」(永地秀太画、聖徳記念絵画館蔵)

けである。銅像を建てる時、誰にすべきか議論が戦わされたと聞くが、陸奥が選ばれたのは当然だと私は思う。日清戦争における「カミソリ外相」陸奥の姿こそ、理想的な外交官だからだ。

陸奥は明治二十五年(一八九二)に外務大臣に就任する以前から、日清戦争を避けられないものと考えていた。当時の李氏朝鮮は、清国と君臣関係にある一方、諸外国を徹底排除して朝鮮の儒学を守ろうという「衛正斥邪」の思想が浸透し、近代化への動きはまるでなかった。そんな朝鮮に対して清国は内政干渉を強め、朝鮮国内は混乱を極めた。しかし、朝鮮を開国独立させなければ、列強、とりわけロシアによる侵略は避けられず、そうなれば日本も危うい――。

陸奥は、日本の置かれた地政学的状況に危機感をつのらせ、採るべき道を模索する。そして至った結論が、武力を行使してでも、李氏朝鮮と清国の関係を断ち切るべし、というものであった。「清韓宗属関係」の破壊である。

ところが、清国の軍力は、日本のそれを遙かに凌いだ。海軍に関しては、日本は積極的に艦船を増やし、日清戦争開戦時には清国の北洋艦隊と総排水量を肩を並べるまでになっていた。しかし、陸軍に目を向けると、日本

軍約二十四万に対して清国は六十三万といわれた。まさに、この軍事力の差を外交技術で補おうとしたのが、陸奥であった。

そもそも清国は、日清戦争開戦の前に、一大失策を犯していた。日本と締結した「天津条約」である。

明治十七年（一八八四）、フランスがベトナムを侵略したとの報せが清国に入る。当時のベトナムは、朝鮮と同じく清国の宗属国であり、清国は当然ベトナムに派兵した。清仏戦争である。日本はこの隙を突き、清国と天津条約の締結を持ち込んだ。

天津条約では、以下の三条が定められている。

- 一、清国の朝鮮への宗主権放棄。
- 二、日本が朝鮮半島に清国と同数の兵力を送る権利。
- 三、将来朝鮮に出兵する場合の、公文書による相互通知（「行文知照」）。

清国に一大打撃を加えることができた——当時ヨーロッパへ留学していた陸奥は、後に記した自著『蹇蹇録』で天津条約を率直に評している。一大打撃、とは穏やかな表現ではないが、天津の新聞『大公報』の記者王芸生が「天津条約は」李鴻章の対日外交の一大錯誤であった」と記しているとおり、これは日本外

交の勝利である。

天津条約は、特に第三条が大きな意味を持つ。すなわちこれは、朝鮮半島内での清国の動向が日本側に筒抜けになることを意味する。しかも第二条では、日本は清国と同数の兵力を送る権利を得たのだ。まさに、朝鮮半島を舞台に日清戦争を存分に戦うための、国際法上の権利を日本は握ったのである。日清開戦の準備は、ここによく整った。

しかし、明治二十五年に外務大臣に就任した陸奥には、まだ大きな課題が残されていた。「漁夫の利」を求めて群がる第三者、すなわち欧米列強の排除だ。当時、西洋の帝国主義国が武力を背景に他国間の戦争に介入し、難癖をつけては利権を奪うというのが日常茶飯であった。

清国を追い詰めた 伶俐な外交戦術

そこで陸奥は、ひとつのシナリオを描く。日清戦争を仕掛けた「主動者」は清国であり、日本はやむを得ず戦うはめになった「被動者」である——諸外国に対して、そのように装ったのである。このような「大義名分」を手に入れることで、列強がつけてくるであろう難癖をあらかじめ防いでおこうというのが陸奥の

狙いであった。

朝鮮半島が東学党の乱に揺れる明治二十七年（一八九四）六月、陸奥は朝鮮の「日清共同内政改革提案」を清国に提出した。財政改革や治安対策など、朝鮮の文明開化に不可欠な改革テーマの清国への提案であった。しかし、すでに朝鮮半島を掌中に収めている清国にしてみれば、このような日本主導の提案など、とうてい受け入れがたいものであった。当然、清国は提案をはねつけた。だが、これこそがまさに日本を「被動者」たらしめた陸奥の戦略であった。

つまり、清国は日清共同の朝鮮改革を拒否したのであり、日本はやむなく、朝鮮を清国から切り離して近代化を進めるため、日清戦争に挑まざるをえない——日本の戦争の大義を公にするため、陸奥はあえて清国による拒否が明らかな提案を出したのであった。

現代人の感覚からすれば、こうした陸奥の外交術は「ずるい」と捉えられがちである。しかし、当時の日本は今とは比較にならないほど「小国」であり、生き残りを賭けて必死に外交術をめぐらせた陸奥を責める気には、私はどうていなれない。ましてや、外交とは単に友好や善隣を求めただけのものではない。国益の確保こそ、最大にして唯一の使命なので

ある。

日清戦争の開戦まで、いかに日本に有利に事を運ぶか。これに徹した「リアリスト」陸奥の姿こそ、実は外交の「原点」を示している。

かくて日本は朝鮮半島を舞台に「眠れる獅子」と恐れられた清国に戦いを挑み、劇的な勝利

利を収めるのであった。

下関条約、そして三国干渉へ

明治二十八年（八九五）四月、下関にて、陸奥は首相の伊藤博文とともに、日本側全権代



- ①「三国干渉」で日本に圧力をかけ、清国へ遼東半島を返還させる。
- ②すぐさま清国から旅順・大連を租借。遼東半島を勢力圏におさめる。
- ③ウラジオストクから満洲を西へ横断する「東清鉄道」の敷設権を得る。
- ④さらに「東清鉄道」のハルビンから南にのびる支線（のちの南満洲鉄道）の敷設権を得る。
- ⑤清国と朝鮮の国境・鴨緑江を越え、朝鮮、日本の領土を窺う。

表として日清戦争の講和会議に出席し、下関講和条約に調印する。清国の全権は、李鴻章であった。講和の内容は大まかに以下の通りである。

- 一、朝鮮半島の独立の承認。
- 二、台湾、澎湖諸島、遼東半島の割譲。
- 三、賠償金二億両（日本円で約三億一千万）の支払い。
- 四、日清通商航海条約の締結と、沙市・重慶・蘇州・杭州の開市・開港、租界での治外法権の承認。

陸奥は当初、老獪な李鴻章を相手に賠償金に関しては三億両、また遼東半島も実際に割譲された地域よりも広い地域を要求していた。こうした外交術は、周囲との「和」を尊ぶ日本人からすればあまりに強硬、または強引と思えるかもしれない。しかし、そもそも外交交渉とは、はじめは大幅な要求を出した上で、徐々に譲歩していくのが鉄則である。

また、陸奥が清国へ過大な要求を示したのは、「国内対策」といった意図もあったであろう。国内とはすなわち日本国民、マスコミである。戦争勝利に沸く当時の国民のことを思えば、それに見合うだけの対価を手に入れないければ、国論が紛糾し、乱れるのは必至であった。だからこそ、陸奥は下関講和条約

で可能な限りの条件を勝ち取っておく必要があったのだ。

しかし、講和条約の調印後、日本にいきよりの横槍よこやりが入った。独仏露による「三国干渉」である。陸奥も、いずれ何らかの干渉が来ることは予想していた。とはいえ、事態はあまりに唐突とうとつであった。

兵力の後援なき外交

「三国干渉」の最中、陸奥は持病の肺結核はいけつかくが悪化し、兵庫舞子まいこで療養中であつた。しかし、病床びょうじょうに伏ふかしながらも、「三国干渉」への対処に関して、陸奥は首相の伊藤と議論を重ねた。伊藤は「三国干渉」への対処策について次の三策を示し、陸奥の意向を尋ねた。

- 一、「三国干渉」を拒否する。
- 二、列国会議を招集し、遼東半島問題を議論する。
- 三、「三国干渉」を受け入れる。

当初、陸奥は第一策を採るべきと主張した。強気な陸奥は、ひとまず「三国干渉」を拒否し、相手の出方うかがを窺うかがいながら、次の打つ手を探まぐろうという主張である。国益を追求する陸奥らしい姿勢といえよう。

結果的に、陸奥は「ロシアを挑発するのは危

険極きまわまりない」との伊藤の説を受け入れたが、第二策の列国会議けいこくかいを開催することに對しては、首を縦に振らなかつた。

陸奥の考えは、次の通りである。ここで列強に隙すきをみせて会議を開催しようものなら、列強は「漁夫の利」を際限なく求め、日清戦争勝利の戦果をすべて失いかねない。おそらく清国も、混乱に乗じて講和条約の「廢紙」を狙つてくるだろう。やむなく干渉を受け入れて遼東半島を返還したとしても、残りの權益は、何としても守るべきだ――。

進むべきときには進み、退くべきときは退く。これこそが「三国干渉」に立ち向かつた陸奥の信念であり、その決断は、苦渋に満ちながら下した、潔いさぎよきものだったといえよう。伊藤も陸奥の考えに合意し、日本は清国に遼東半島を返還することになる。直後、ロシアは旅順りょじゆん、大連を清国から租借そしやくのみならず、満洲を横断してロシアの東アジア支配の拠点きょてん・ウラジオストクへとびる「東清鉄道」の敷設権、また「東清鉄道」のハルピンと旅順・大連をつなぐ満洲縦断の支線しせん（のちの南満洲鉄道）の敷設権も得る。こうしたロシアの動きに對して、日本が「臥薪嘗胆」の時代に入つていったのはよく知られている。

日清戦争の開戦に際して、陸奥は外交で軍

事力の不足を補おうと粉骨碎身ふんこつさいしんしてきたが、『蹇蹇録』の最終章で次のように認めている。

「要するに兵力の後援なき外交は如何なる正理に根拠するも、その終極に至りて失敗を免れざることあり」

この文からも、軍事力の後ろ盾だてなく外交を行なつてきた、陸奥の苦心くしん慘憺さんたんが伝わる。

その後、日本は「臥薪嘗胆」を合言葉に、再び這い上がる。講和条約で得た賠償金で艦船の購入を進め、海軍力を充実させ、また日英同盟を結んで後顧こうこの憂うれいをなくしてロシアに挑んだ。何よりも大きかつたのは、この「臥薪嘗胆」の時代に日露戦争に向かつていく「国民精神」が形成されたことであろう。

陸奥は『蹇蹇録』で、「他策なかりしを信ぜんと欲す」と、「三国干渉」について、振り返っている。この言葉を「自己弁護」と捉えるのは、陸奥の苦衷くちゆうを察することのできない凡庸ぼんようである。ベストの選択が叶わなくとも、全力でセカンド・ベスト、サード・ベストを狙う――国益のため、常に最善の策を求めて日本外交の舵かじ取りをした、「カミノリ外相」陸奥らしい最後の言葉がこれである。明治三十年（一八九七）、陸奥はその後の日本を案じつつ、五十四歳でこの世を去つた。日清戦争時の過勞が祟たつたのであろう。